

桜の表象の力が引き寄せたシンポジウム

熊本保健科学大学副学長 岡部由紀子

熊本北ロータリークラブから百本の桜を恵贈されてちょうど丸一年、季節がめぐって「花」のもとにまた、つどいのご縁が広がってきていることを、感じております。本学にいただいた桜は、まだまだほっそりとした若木ながら、それでもけなげにいくつかの花をつけ、「われこそは、さくら」と、声高ではないけれど、なにやら気概を感じさせる風情でたっております。幼いながら、桜は、早くも、その表象の力を発揮し、今回のシンポジウムを引き寄せたかのようです。

午前の部では最初に、熊本北ロータリークラブ会長でいらっしやいました西川毅彦様から、ロータリー精神とサービズ活動の意義についてお話をいただきました。会員の皆様が姉妹クラブである台北羅馬クラブの記念行事に出かけられているなか、居残りでシンポジウムに参加してくださいました。

一次いで、金春流の東軍三様からの解説と紹介に続き、和泉流の四世野村小三郎師による狂言『伯母が酒』、そして金春流松融会の皆様による『船弁慶』の演能がございました。アリーナにしつらえられた能舞台は、拝見する私どもの耳にも目にも、いまさらながらに懐かしさと新鮮さを覚える、五感を一挙にリセットしてくれるようなお舞台でした。静御前は、やはり、私たち日本人

には吉野の里を連想させる白拍子、舞台の彼方に、これから静が落ちていく、あちこちに桜をかかえた吉野の山を予見しながら、桜に囲まれたこの日にここで舞を拝見する贅を堪能いたしました。地謡の皆様が、最後に「祝言」を添えてくださいましたことも、思いがけない、晴れがましく嬉しい驚きでした。

午後の部では、まず、益城病院会長犬飼由貴子様から、「熊本にも咲かせよう紅しだれ桜を」という題で、本当に心温まる、桜が結ぶご縁について、お話を聞かせていただきました。先に犬飼様から私どもが分けていただきました福島県三春の「滝桜（千年桜）」の苗木は、本日のお話によると、百何十本もの姉妹や兄弟を県内一円に持っているとのこと。お互いは知り合わずとも、桜がつなぐ緩やかな「えにし」のゆかしさが思われました。

続いて、慶誠高校の武藤哲夫先生が、こんどは自然科学者の観点から、「桜を知ろう」という題で、まずは桜と日本人のつきあいの歴史をソメイヨシノに至るまでお話くださり、人間ばかりか、昆虫、菌類にまで、桜をとりまくいのちの営みのあることを教えてくださいました。桜が「休眠打破」という自然界の巧妙な仕組みをもつ、学名で呼ばれる自然科学的存在でもあることに、あらためて感じ入るお話でした。

次に、熊本地方気象台長の石田尾拓司先生には、「気象」という、水の惑星地球の表面を覆っている、大気の動き、流れが十三種類の植物と十一種類の動物によって「観測」されて、私たち人間にとっての意味を持つことを教えていただきました。私個人としましては、クマゼミがはいっていないなかったのが残念です。さらには、地球温暖化について、データに依拠した説得力のある警

告をいただきました。

休憩を挟んだ特別講演は、俳人としてご活躍の長谷川權先生に、「野生の桜」と題して、「山の桜について、たいへん興味深い視点からお話ししていただきました。せっかくのお話について何か繰り返すのは愚かですから、もう何も申し上げません。が、一つだけ。伺いながら「そうか、昨今の学生が言葉に弱いのは、地球温暖化のせいでもあるのか」(笑) と思つた次第です。

以上で、本日のシンポジウムを終わりとさせていただきます。会場の皆様には、長くも贅沢な一日であったと感じていただいておりますでしょうか。本来のシンポジウム、古代ギリシャでのそれは、お酒が入って、さらに陶然としたものであったようです。ご用意はしておりませんが、今晩は、皆様それぞれに、桜の国に暮らし、桜に遊ぶ一刻をお召しいただきたいと思っております。

後記：長谷川權先生には、特別講演者から戴く定番の色紙をおねがひしたところ、「花びらの」の句を、闊達なお人柄を思わせるひろやかな書体で認めていただきました。

花びらの空に遊びて降りて来ず
權

ご講演では、俳句ではなく、和歌をあげてお話くださいましたが、最後の桜の歌が登場したと

き、いつも内心「桜より柳では」と連想していたわが身の記憶力のあてにならないことに気づか
されました。

あをによし奈良の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり

小野老 『万葉集 卷三』